

いわき湯本病院

症 例 概 要 患者氏名：80代・女性

病名：圧迫骨折

入院期間：令和7年7月～

本ケースは、腰痛による身体機能の低下や認知機能の低下が進行した患者さんに対し、多職種が連携し在宅生活の可能性を見出した取り組みである。入院当初は腰痛や排泄へのこだわりから安静保持が難しく、センサーマットによる安全確保は患者さんに負担となっていた。そこで見守りカメラを導入し、排泄時のみ介助を行う体制に切り替えたことで、患者さんの安心感が高まり「来てほしい時にいつも来てくれる」と信頼を寄せられる関係を築いた。さらにリハによる立位安定の向上や集団活動への参加、介護職による生活支援、MSW・ケアマネ・訪問スタッフによる継続的な支援調整を通じて、当初は困難とされた在宅生活の継続可能性を再び見出すことができた。

内 容

本ケースは、腰痛による身体機能の低下や認知機能の低下が進行した患者さんに対し、多職種が連携して在宅生活の可能性を見出した取り組みです。

患者さんは長く地域で暮らしており、ご家族も「できる限り自宅で生活を続けさせたい」という強い希望を持たれていました。しかし認知機能低下と体動困難から、通院もままならず、在宅生活継続は困難と考えられる状況にありました。そこでMSWとケアマネジャーが中心となり、ご家族の思いを丁寧に受け止め、当院への入院を経て、安心した状況で在宅継続の可能性を検討する体制を整えることができました。入院当初は腰痛の訴えが強く、立位保持も困難で、さらに認知機能の低下から安静保持が難しい状態でした。排泄へのこだわりが強く、自ら動き出してしまうことも少なくありませんでした。当初はセンサーマットを用いて安全確保を図りましたが、センサー反応のたびにコールが鳴り続けるため、看護師の訪室回数が増え、患者さんは「たびたび来てもらって申し訳ない」と恐縮される様子がみられました。そこで見守りカメラを導入し、端坐位になるまでは自由に行動できるようにし、歩行での排泄動作に移る際のみスタッフが介助に入る対応へ切り替えました。その結果、患者さんが恐縮する機会が減り、安心して生活できるようになりました。排泄誘導を重点的に行ったことにより、患者さんからは「来てほしい時にいつも来てくれるね」という言葉もあり、信頼関係を築きながら安全と尊厳を両立することができました。介護職は日常生活動作を丁寧に支え、安心できる生活基盤を整えました。リハスタッフは立位の安定性を高めるための運動療法を中心に実施し、さらに集団レクリエーションを通じて活動性と精神面の安定

を促しました。入院前から関わっていた訪問リハや訪問看護スタッフも情報共有を行い、在宅復帰後の生活を意識した支援につなげることができました。このように、医師・看護師・介護職・リハスタッフ・MSW・ケアマネ・訪問スタッフがそれぞれの専門性を発揮し、患者さんご家族の希望に寄り添いながらチームで取り組みました。その結果、当初は施設入所が避けられないと考えられた状況においても「在宅生活を続ける可能性」を再び見出すことができました。患者さんご家族が安心できる生活を支えることに成功した本取り組みは、まさにGood Our Team賞にふさわしい事例と考えます。

医師（当院）：診断・疼痛コントロール、リハ適応判断、在宅継続の可能性検討

看護師：センサーマットから見守りカメラへの切替、排泄誘導の重点化、精神的負担の軽減

介護職：更衣・排泄など日常生活援助、安全で快適な生活環境の提供

リハスタッフ：立位安定性向上、歩行機能改善、集団活動による精神面の支援

MSW：家族意向を尊重し入院調整、施設入所一択の状況を打開

ケアマネ：介護保険サービスの調整、在宅継続を見据えた支援体制構築

訪問スタッフ：在宅生活支援、身体機能維持、家族介護負担の軽減